「大人ロリータ」からみる女性性と少女性の関係性
－中国のロリータファッション文化参入者の生活史をもとに－

馮　可欣

1. はじめに

1990 年代以降、先進諸国では性別役割分業がある程度緩和され、女性の地位が相対的に向上した（高橋 2020）。このような時代に生まれ育った若い女性たちは、第一波、第二波フェミニズムの成果を享受しながら、文化と消費を中心とする自己表現を通じて主体性を追求しつつある（田中編 2021）。若い女性たちによって営まれてきたこの種の文化実践は研究上の注目を集めており、McRobbie による Girls and Subcultures に関する研究を先駆けとして、英語圏では若い女性による文化の創造と参加に関する Girls' Studies が一ジャンルとして確立された (McRobbie [1991] 2000)。日本においては、戦前の女学校と少女雑誌を中心とする少女文化を継承しつつ、1970 年代後半に花開いた少女マンガ、制服ファッションなどの一連の「カワイイ」文化、および今日の女子文化も研究対象にあげられる。

そのような若い女性による文化実践の流れの中で、日本のロリータファッション文化（以下「ロリータ文化」）は世界的に大きな存在感を見せている。1980 年代の DC ブランドに源流を持ち、2000 年代に日本で大いに注目され始めた（八幡・渡部 2013）ロリータ文化は、10 代後半から 20 代前半までの女性、即ち「少女」（以下「ロリータ少女」）を主要な担い手としている（松浦 2007）。ロリータ少女たちは、過剰な装飾性と脱性化したイメージを特徴とするロリータ服で（八幡・渡部 2013 ; 吉原 2014）、少女時代の永続と成長拒否の志向を象徴する「少女性」（松浦 2007）を打ち出し、性的対象物にされることを拒否し、妻・母の役割から自らを隔離している（吉原 2014 ; 冨田 2017）と論じられてきた。そこでは、ロリータ文化の少女性は男性中心社会が規定する女性性の規範と対極にある存在と位置づけられている。

一方、若い女性たちの文化実践が発展し、影響力が拡大している中、幅広い年齢層の女性も少女を中心としてきた文化実践に積極的に参加するようになった（田中編 2021）。そのような流れの中で、ロリータ文化に参加する成人女性、すなわち「大人ロリータ」に注目が集まりつつある。日本では、ロリータ文化を発信したファッション誌『KERA』が 2015 年から大人ロリータに関する企画を展開しており、2017 年に紙媒体での発行を停止してデジタル版に移行してからも関連記事を掲載し続けている。冨田は、2000 年代の少女期にロリータ文化に魅了され、30 代、40 代になった今でも継続的に参加している女性を大人ロリータとして捉え、大人ロリータ向けの雑誌には、成人女性をとりまく外見の「女らしさ」に関する期待とより合致するように、シルエットを強調する「落ち着いた大人っぽい」ロリータ文化を模索している姿が窺えると指摘している（冨田 2017）。大人ロリータにおける女らしさへの志向には、従来のロリータ

文化研究が主張してきた、性的対象化を拒否する少女性との相違がみられる。

大人ロリータは、中国においてもみられる。クールジャパン政策の策定とカワイイ文化の海外進出に伴い（八幡・渡辺 2013）、2015 年前後からロリータ文化は中国において爆発的な人気を集めている [1]。厳しい受験教育のもとで不自由な少女時代を送ったことに加えて、ロリータ服は高価であるため、中国においては受験競争から解放され、経済的にある程度自立した成人女性になってからロリータ服を着用し始めた 20 代後半、30 代が多い。近年、家庭に入ると同時に、モデルやインフルエンサーとして活躍する「ロリータママ」がおおいに注目され、親子ペアルックのロリータ服も次々と発表されている [2]。ロリータママという呼び方が象徴するように、年齢のほか、大人ロリータは妻・母の役割との関わりでも捉えられている。その捉えられ方は、妻・母の役割から距離を置く従来のロリータ文化の少女性とは異なるものである。

このように、近年の日本と中国における大人ロリータの動向が示すのは、ロリータ文化内部の多様性であり、それは、従来の少女性と女性性の対立構図によって説明しきれるものではない。 この新しい現象は、従来の認識枠組みを相対化する契機を孕んでいる。本稿では、大人ロリータを自認し、妻・母の役割の遂行や女らしい外見の呈示など、女性性の規範への同調が求められていることを自覚している年齢層の女性を研究対象とし、ロリータ文化に参加する成人女性における女性性の規範と少女性の関係性の新たな側面を浮き彫りにすることを目指す。

2. 先行研究

本節では、少女性と女性性の規範の関係性がいかに捉えられてきたのかについて、先行研究を整理する。全体像をまず把握しておくと、ロリータ文化に関する従来の研究は、学問分野としては、ジェンダー研究とサブカルチャー研究に大別される。

まず、ジェンダー研究では、女性を性的対象物とすることへの拒否からロリータ文化を論じる研究がある。性的要素の払拭と子どもっぽさの呈示を通じて、ロリータ文化の愛好者たちは性的対象物とされることを拒絶している、と論じられている（西村 2004；吉原 2014）。そして、ロリータ文化の参加者は、男性の視線に無関心な態度を示し（有田 2013）、リボンとレースを過剰に取り入れる形で、男性中心社会で「普通」とされる女らしさの度合いを遥かにオーバーし、ジェンダー秩序を攪乱しうる、との指摘がある（北村 2017）。ロリータ文化は男性に媚びないファッションとして位置づけられ（趙 2019）、モテ服としての女性ファッションに潜んでいるジェンダーの非対称性を乗り越える可能性を有しているとも指摘されている（有田 2013）。一方、ロリータ少女に関する従来の研究とは異なり、冨田は大人ロリータについて、自らの美意識と女らしさの基準との間にバランスを取ろうとする姿勢を示していると指摘している（冨田 2017）。

ジェンダー研究においては、ロリータ少女は少女性の追求を通じて妻・母の役割期待に関する女性性の規範から距離を置くとも論じられている。徐・穆は、ロリータ少女はロリータ文化の子どもっぽさを利用して娘というキャラクターを演じることで、家父長制の規範に従わないことへの非難を避けながら、妻・母の役割を将来に先延ばしして自由に生きる可能性を求める、と指摘している（徐・穆 2021）。冨田によると、ライフステージの変化に合わせて女性が購読する女性誌の種類と内容は変化するが、大人ロリータ向けの雑誌にはロリータ少女向けの雑誌

と同様に、結婚や出産などの内容は見て取れない（冨田 2017）。

では、サブカルチャー研究からロリータ文化はどう論じられてきたのか。女性のサブカルチャー研究の先駆けである McRobbie が、女性のサブカルチャーへの参加は男性中心社会への抵抗となりうると論じ、女性の文化実践への注目は文化の領域で長らく不可視な存在であった女性を可視化すると指摘した（McRobbie [1991] 2000）。これをふまえて、ロリータ文化を個性の追求による男性中心社会への抵抗や、自分らしさの呈示として捉える研究がある（谷本 2017；松浦 2007）。ロリータ文化の参加者は、閉鎖的な世界に自分を閉じ込めて個性と内的な満足を追求し、主流文化への「静かな抵抗」をなしている、との指摘もある（黄 2012）。ロリータ文化の少女性が直接的に性的対象化や妻・母の役割規範と結びつけて論じられることはなく、むしろ先述の McRobbie の指摘を踏まえて、権威的な男性性と従属的な女性性（Connell 1987=1993）という非対称な関係性への抵抗の契機として、ロリータ文化の少女性は論じられている。

こうした従来の研究は、大人ロリータの文化参加における少女性と女性性の関係性という本稿の問いに沿って考えると、以下の問題を残している。

第一に、従来の研究のほとんどは「ロリータ文化の参入者＝少女」という図式を前提としており、少女性は女性を性的対象物とすることと妻・母の役割への拒否と位置づけられている。しかし、この少女性と女性性の規範の二項対立によっては、すでに結婚して妻・母の役割を担っている成人女性、例えば中国で浮上してきたロリータママが、ロリータ文化にいかなる少女性を見いだしているのかを説明できない。大人ロリータが顕在化しつつあるにもかかわらず、それに関する研究は冨田（2017）を除くとほとんど見当たらない。またその冨田も、女らしさの規範と折り合いをつけようとしている大人ロリータには言及するものの、ロリータ文化の少女性は年齢を問わずに自分の美意識を貫く姿勢にあると論じたうえで、家庭に入らずに少女的なファッションを身にまとう彼女たちのことを「疑似少女」として位置づけている。ここでも、少女性と女性性が二項対立的に捉えられていると言える。結婚、出産、育児の一連のライフイベントを経験し、妻・母の役割を担うことを余儀なくされている大人ロリータたちは、はたして成人女性という現実から目をそらすことができているのか。家庭に入った大人ロリータの文化実践における少女性と女性性の規範の関係性には、まだ検討の余地が残されている。

第二に、先行研究では、成人女性たちをとりまく女性性の規範が、女性の性的対象化と妻・母の役割規範の二つの要素に単純化され、少女性がその対極にあるものとして捉えられている。しかし、女性性の規範と少女性の意味づけは、いずれも今日の社会において変化し続けているため、両者はより複雑な関係にあると捉え直さなければならない。従来の研究における女性性の捉え方は、性別役割分業と異性愛秩序の非対称性を中心的な批判対象とする第二波フェミニズムに依拠するものである。しかし Budgeon は、女性として生きられる経験がますます複雑になってきている現代のジェンダー関係や社会的状況に対して、第二波フェミニズムの適用範囲は限られていると批判的に論じ、「新しい女性性」の規範の登場を指摘している（Budgeon 2011=2020）。第二波フェミニズムにおいては、女らしい身体を磨く化粧、ファッションなどの行動は男性中心社会による女性身体の抑圧として批判されるが、女性の社会進出が一般的になり、性別役割分業がある程度緩和された現在、消費と魅力の自己向上によって自らをエンパワーすることは「新しい女性性」の規範になっている（Jeffreys 2015；Gill 2007）。女性は性的対象

から欲望する性的主体へと変容しており、消費によって身体を自己愛的に着飾ることは、女性の主体性の新たな成立経路となっている（Gill 2007）。また、幅広い年齢の女性が少女文化に参入している現在、少女性は少女特有の在り方ではなくなり、年齢や立場に囚われない自由な生活をもたらす主体性や積極性を伴うものとして意味づけ直されている（田中編 2021）。ゆえに、大人ロリータの文化参加における少女性と女性性の規範との関係性を検討する際には、以上に述べた女性性の規範の刷新と少女性の変容を考慮にいれる必要がある。

以上を踏まえて、本稿では、家庭に入った大人ロリータの典型とも言える中国のロリータママが少女性と女性性の規範のそれぞれをいかに意味づけるのかを検討し、両者の関係性を明らかにする。

3. 研究の対象と方法

筆者は 2022 年の 4 月から 12 月初頭にかけて、ロリータ文化に参入した女性 18 名を対象として生活史調査を実施した[3]。本稿ではこのうち、結婚・出産の経験を有している、中国のロリータ文化圏で有名なインフルエンサーである K の生活史を中心に扱う。筆者自身もロリータ文化に参入していたため、K とは調査前から知り合っていた。筆者の研究関心を知った上で、K は自ら調査への参加を申し込み、積極的に調査に協力した。なお、本稿の作成にあたって、2023 年 7 月と 10 月[4]の 2 度にわたって追加調査を行い、2022 年の最初の調査と合わせて約 3.5 時間のインタビューデータを得た。調査には、通信アプリ Wechat の通話機能を利用した。調査内容は、成人女性になるまでの生い立ち、家庭、仕事、娯楽などの場面で起きた女性の身体に関係する、あるいは性と関連づけられた役割に関する状況や出来事（例えば化粧、妻・母としての生活など）、それにロリータ文化に関する文化実践の具体である。

調査の実施にあたっては、調査対象者に調査の趣旨、方法、個人情報の扱い、研究参加の任意性と自発性を口頭で説明し、後に文章で調査を許可する旨の確認を得た。発言は K に許可を得たうえで録音し、その後逐語録を作成した。以下では匿名性を確保するため、引用する語りや得た情報には、文脈の理解に支障をきたさない範囲で改変や補足を加えているところがある。なお、本稿で取り上げる K は中国のロリータ文化圏では有名なインフルエンサーであり、年齢、SNS でのフォロワー数などの情報の公開により本人が特定される可能性があるため、これらのデータには匿名化の処理を加える。本稿については、K に内容を確認し公表の許可を得た。

K の生活史と属性の概要を以下に説明する。現在（2023 年）30 代後半で 40 代に近い K は、中国の大都市の裕福な家庭に生まれ育ち、X 年に大学を卒業した。同年、漫画・雑誌の出版会社に入社し、1 年間ロリータ文化に短期間参加していた。X+5 年に退職し、X+6 年に結婚、出産した。X+7 年に、K は「産後うつ」[5]を経験し、その頃からロリータ文化に本格的に参入し始めた。2015 年に、中国ではロリータ文化が広く注目され始め、その後大きな発展を遂げている。K は、中国におけるロリータ文化の流行に乗り、X+9 年に、インフルエンサー活動を始めた。2023 年現在、K は中国のロリータ文化圏の中で最も有名な大人ロリータの一人として活躍し、SNS で 20 万人近くのファンを持っている。

本稿で扱うのは K の生活史のみである。しかし、自分の結婚生活、育児、仕事とロリータ文化への参入を SNS で発信してインフルエンサーとして影響力を持っている K の言動は広く共

感を呼んでおり、中国社会において理想的な生き方を提示している存在であると言える。中国における大人ロリータが追求する少女性と女性性の規範との関係性を、K の事例から一定程度明らかにすることができるだろう。

4. 大人ロリータ K の生活史における少女性と女性性の規範の関係性 ＜「産後うつ」からの「回復」とロリータ文化＞

X 年に大学を卒業して日本の漫画、雑誌を出版する会社で勤務していた K は、ロリータ文化を好んでいた同僚のすすめでロリータ服を着始めた。当時 K は、ロリータ服を「二次元的なかわいいファッション」[6] として「たまに着るという感じで」着用し、1 年後にロリータ服の着用をやめた。X+5 年に K は仕事を辞め、X+6 年に結婚・出産した。K は家で主婦として育児と家事に勤しむ中、気分が落ち込んでいた。当時の状況を、K は「産後うつ」であったと振り返った。K を心配していた友人は、K を音楽のライブに誘った。それをきっかけに、K は「ロリータ文化に救われた気がし」て、それ以来毎日ロリータ服を着用するようになった。

K：家に閉じこもったとき、自分は一生こうであるかもしれないと考えたら、怖くなって、(略)「産後うつ」の症状が出ました。友人が気分転換としてライブに行きましょうと誘ってくれました。行くなら、着飾っていきたいと思って、クローゼットの片隅にあったロリータ服を取り出してそれを着て行きました。久々に楽しかったです。鏡の中の自分を見つめると、自分はまだ若くて、きれいで、これからの人生の中でも楽しいことがきっといっぱいあることに気づきました。(略) そのとき決めました、今のままじゃダメ、一歩踏み出さないといけないって。
＊（調査者　以下同様）：ロリータ服は K さんにとって大きな意味を持っていますね。
K：そうですね。(略) ロリータ服を着たのは偶然ですが、でもロリータ服はやはり、一般の洋服よりもはるかにかわいくて、個性的です。普段は適当に T シャツとかを着ていたのが原因か、ロリータ服を着る自分を見るときのインパクトはとんでもないものでした。そのギャップにびっくりして、自分がまだ若くて、これからの人生もいろんな可能性があると意識して、そしてその姿で生きていきたいと思い始めました。

K はロリータ服を自分を「産後うつ」から救い出したものとして位置づけており、妻・母の役割規範に囚われず自由に生きる人生の可能性を取り戻したと語っている。Cornell によれば、人はつねに自由意志によって選択する存在ではないからこそ、なりたい自分を自由に想像する空間が重要であり、それは男性中心社会が規定する象徴秩序からの女性の解放につながる（Cornell 1995）。個性を過剰なまでに提示しているロリータ服は妻や母の理想像からはみ出す形で、女性としての生き方に関する K の想像力の範囲を引き伸ばし、「産後うつ」からの「回復」のきっかけとなった。一方、K が開かれた人生の可能性に気付くきっかけを提供したのはロリータ服だったが、その可能性は依然として、若くて美しい女性の身体に固く結びついている。ロリータ服によって自らをエンパワーすることには、女性の価値を美と若さで決定づける美しさ規範（Wolf 1991）に同調する側面があることも窺える。

＜母の役割規範とロリータ文化の少女性の葛藤＞

「毎日を人生最後の日だと思って生きよう」と決心したKは、ロリータ文化に再び参入し、多くの「同好」と知り合い、お茶会や中国のコミックマーケットにも参加し始めた。そこで、Kは「一昔前からロリータ服を着始めて、母になっても着続ける友人が何人かいます。みんな子どもを連れてお茶会をしています」と語っている。Kはロリータママとして生きることの楽しさを感じて「産後うつ」から段々と「回復」したが、新しい悩みを抱えるようになった。

＊：母になったら母らしくしなさいみたいな約束事があるじゃないですか。K さんはロリータ服を着て生活する中、それに気づいた経験はありますか。
K：それをはじめて感じたのは、母とのやり取りの中でです。（略）母は、あなたの子どもを誘拐する人がいたら、ロリータの格好だとこの子が自分の子どもだと証明することもできないじゃないかと言いました。じゃあどう証明すればいいの、母乳の汚れがついたTシャツを着いたら自分がこの子の母だと証明できるのと言い返しました。

ロリータ文化の少女的なイメージと社会的に期待される母親像、Kの言葉によれば「母乳の汚れがついたTシャツ」との齟齬は、Kが息子を連れて子ども教室に通ったときの、ほかの母親たちの驚きの表情により一層鮮明に示されることになる。

K：息子が2歳くらいのとき、子ども教室に通い始めました。初日の授業で、ほかのママたちを見てびっくりしました。悪口みたいで申し訳ありませんが、そこのママたちはみんな素顔で、髪も2、3日洗っていないように見えました。（略）母になるとは、いわゆる外見を気にしないこと、化粧にかかる時間を子育てに費やすことです。
＊：その時、K さんはどのような格好をしていましたか。
K：髪色がピンクで、ロリータ姿です（笑）。あっ、なんか今考えたら、むしろほかの母親たちは私をみて驚いた顔をしていました。
＊：最近「ホットママ」に関するドラマは結構人気ですが、K さんはそれを知っていますか。
K：ホットママは段々と受け入れられるようになった気がしますね。でもロリータママはまだ珍獣です。まあ、こんな年になっても反抗期って感じですね。

この語りには、子育てに関する一連の家事労働にとどまらず、それにふさわしい格好を通じて子どもへの献身を表出しなければならないという母親らしさの規範の存在が窺える。一方、近年では、自己と子どものバランスを取ろうとする洗練された新世代の母親像が中国のドラマ、映画、テレビのバラエティー番組などで量産され、「ホットママ」と呼ばれるようになった[7]。外見の美しさと母親の役割のバランスを取ることは女性の主体性の発露として受け入れられており、そこでは美しさと母親らしさの衝突が緩和され、ホットママという新しい母親の理想像が成立したとされる（曹 2019）。一方、ロリータ服は個性的な服装であるがゆえに、子どもよりも自己を優先する生き方を象徴するため、「反抗期」というレッテルを貼られ、妻・母の役割からはみ出したものとしてネガティブに受け止められている。

＜インフルエンサーとして大人ロリータの生き方を発信する＞

ロリータ文化に参加した K は楽しさを感じた一方、ロリータ文化の少女性と成人女性をとりまく妻・母の規範との間に葛藤を感じた。そして、K の職場への復帰とインフルエンサーとしての活動の開始に伴って、このような葛藤の意味づけはまた変化をみせることになる。

出産から 3 年後の X+9 年に、K は知人の紹介で中国の大手企業で働き始めた。K が働いている職場は多くの業務がオンラインで行われ、若者と接触するチャンスが多いため、「ロリータ服は仕事の支障にならないだけでなく、むしろ若い子たちとの距離感を縮められるもの」と K の上司に判断されている。そのため、K は職場においてもロリータ服を着用し続けている。ロリータ服の着用が職場で評価されたことに伴い、K はロリータ文化を、趣味を超えてより「有意義な形で活用する可能性」を意識し、中国の SNS で自身の生き方について発信するインフルエンサー活動を始めた。2023 年現在、K は SNS で 20 万人近くのファンを持っている。

K：“変わり者”としての自分の生活をシェアして、人生の様々な可能性を発信したいです。（略）前にも言いましたが、子ども教室に通っていたとき、ほかのお母さんが私を見て最初はびっくりしました。けど、大人ロリータとしてインフルエンサーをやっていることが知られてから、周囲から変人を見るような視線は段々となくなりました。自分が勝手にそう思っているだけかもしれませんが、その影響で子ども教室のママ友たちも変化を見せていますよ。髪を派手な色に染めたり、化粧したり、ダイエットしたりして、「お母さん感」が薄くなりました。（略）母も私がロリータ文化でお金を稼いで成功したのをみて、自分の娘がちゃんとしていると認識を変えました。やっと母から理解してもらいました。

妻・母の役割とロリータ文化への参加の間で葛藤し、その葛藤を乗り超えようとしている K の生き方は、発信に値する素材として再解釈されている。大人ロリータとして発信することで K は、妻・母になっても外見を重視して自分らしさを追求するという生き方をほかの母親たちに示している。それだけでなく、今まで葛藤に満ちたロリータママとしての生活は正当化されるようになった。K の母の考え方の変化、即ち反対から理解に至るプロセスは、それを象徴的に示している。

インフルエンサーとして成功した K は大人ロリータとして受け入れられるようになった。この経験を踏まえて、K はロリータ文化の少女性を積極性と主体性として再解釈し、齟齬の生じていたロリータ姿と妻・母の役割に関する女性性の規範を結びつけて説明している。

K：美容にお金を惜しまずにどんどん費やしていく友人がいまして。同じ年なんですが、彼女よりも私のほうが若く見えると周りからよく言われています。そこで思ったのは、ロリータ服をずっと着ているのが一因かなあと。でも、少女というのは、やっぱり化粧や美容で維持される外見の若さだけではなくて、それより重要なのは精神的な何か。精神が若かったら、見た目も自然に活力あるように見えるじゃないですか。（略）ロリータ服を着て身なりを完璧に整えると自信と余裕を見せることができます。育児や仕事で疲れ果てた主婦や社畜ではなく、自分の趣味を持って、バランスのいい、豊かな生活を送っているのだということですね。

以上のように、K は友人の外的若さを追求する美容行為を比較対象とした上で、若く、美しく、個性的にみえるロリータ文化の少女性を内的若さの表出として読み替え、その優位性を主張している。これを通じて、K はロリータ文化の少女性を、妻・母に関連する役割、キャリアと自分らしさの間でバランスよく生活することを可能にする積極性や主体性を有するものとして意味づけている。これまで葛藤関係にあった妻・母の役割とロリータ文化への参加は、主体性、積極性を象徴する大人ロリータのイメージによって統合されている。

＜成功した大人ロリータ、その後＞

K は「産後うつ」から「回復」し、周りの支持と自身の努力でキャリア女性として、そして中国のロリータ文化圏において名のあるインフルエンサーとして活躍している。

一方、40 代が迫る K は加齢とロリータ文化への継続的な参加について、複雑な気持ちを抱えている。K は「普段の振る舞いからメンタル的に若いほうだと思われるのが原因なのか、30 ぐらいの頃から現在まで、周りや SNS では『学生さんだと思っていました』とか、驚きの声がほとんどです」と述べている。「加齢とかでは特に悩んでいません。若い子のほうが可愛いと誰もが思っているでしょうが、そもそも自分が好きで今までロリータ服を着てきましたので、今さら世間の目を気にすることはないと思います」と K は語っている。一方、K は「ピンクを着るのはもう限界かも」と吐露し、「人は老いるものです。いつかふわふわ系をやめて、落ち着いた感じのロリータ服や、カジュアルなものを着るかもしれません」とも語っている。

以上の語りで、K はロリータ文化への参加を自分のためだと主張し、若さに高い価値を置く「世間の目」、すなわち男性中心社会に抵抗を示している。それは、先行研究が指摘した、性的対象物にされることを拒否するロリータ文化の少女性（吉原 2014；有田 2013）と合致しているようにみえる。一方、K は加齢に伴ってロリータ文化への継続的な参加への躊躇をも吐露している。その躊躇は、「ふわふわ系のロリータ服」、「落ち着いた感じのロリータ服」、そして「カジュアルなもの」の三項の対照によって象徴的に提示されている。一見矛盾している K の語りの背後に、自身の容姿がまだ若いと判断してロリータ文化で自らをエンパワーできる主体性の感覚と、将来の加齢に関する不安を同時に抱えている、40 代の直前にいる女性であるがゆえに抱えざるをえない心境が窺える。その心境には、若さと美を要請する美しさ規範（Wolf 1991）の強制力が読み取られる。若さの追求を女性を性的対象物とする男性中心社会から切り離し、それを主体性と積極性を意味する内的若さとして読み替えようとする大人ロリータ K の文化実践の限界性が窺える。

一方、ロリータママとして成功した K は、夫に対して後ろめたさを抱えている。

K：夫はいい大学を卒業して、一度は大手企業で働いていました。でも今は家にいる時間が多いです。いわば「専業主夫」ということですね。（略）知人の中では、それが進歩的とか、フェミニズム的とか好意的に受け止められることが多いですが、なんだか後ろめたさというか、罪悪感さえ感じました。夫婦の立場が入れ替わっただけで、（略）結局変わりません。

K のライフスタイルは、周りから女性の主体性と強さとして認識され、家庭内役割分業を乗

り越えたかのようにポジティブに評価されているが、K はそれが単なる立場の入れ替わりであり、構造自体は変わっていないと捉えている。K による夫に対する後ろめたさは、ジェンダー役割分業という構造的な抑圧の前での個人的な努力の限界性を鮮明に浮き彫りにしている。

5. 考察

5.1 少女性と女性性の規範に関する意味づけ

本節では、「産後うつ」、育児、インフルエンサーとしての活動、インフルエンサーとして成功した後という四つのステージにおいて、K がどのような女性性の規範に遭遇し、それをいかに受け止め、そしてどのような少女性をいかに追求したのかを検討し、ロリータ文化における少女性と女性性の規範との関係性について考察を行う。

第一の「産後うつ」のステージでは、K にとって女性性の規範は、仕事をやめて育児に専念するという母役割として作動している。それは今までの生活からの切断感と未来への不安、すなわち「産後うつ」の「発症」によって具体的に示される。それに対して、ロリータ服の個性的で少女趣味に満ちたスタイルは、妻・母の役割に囚われずに自由に生きることに関する想像力を K にかき立てた。一方、K がロリータ服を通じて主体的に生きる可能性を意識したことには、若くて美しい女性の身体が関わっている。K が若さと美しさを期待する女性性の規範に影響されている（Wolf 1991）側面も同時に見て取れる。

第二の育児のステージでは、K にとって女性性の規範は、子育ての中で、子どもへの献身、および献身の姿の表出、と意味づけられている。近年、この規範は美しさと子どもへの献身の両立という新しい形を取っている。にもかかわらず、子どもっぽさと装飾性を特徴とするロリータ文化の少女性は、個性、若さと美しさの追求を明瞭に提示しているため、美しさと母の役割の両立より、母の役割からはみ出して自分を優先する生き方を象徴するものとして周りからネガティブに受け止められ、女性性の規範との齟齬を引き起こしている。

第三のステージ、インフルエンサーとして活動している時期には、子どもへの献身という母の役割規範との葛藤の中で、ロリータママとして成功をおさめた K は、ロリータ文化の少女性を内的若さ、すなわち積極性と主体性として再解釈しており、個性、若さと美しさへの追求をこの内的若さの外見上の表出として読み替えている。この読み替えによって、これまで対立関係にある母の役割規範とロリータ文化の少女性は、主体性と積極性という次元で統合されている。ロリータママとして SNS で発信している K は、規範からはみ出した逸脱者ではなく、家庭という私的領域を超えてより広い社会とつながる積極性と主体性を併せ持ったモデルたる存在として受け止められるようになった。

第四のステージでは、インフルエンサーとして成功をおさめた K は、年齢に囚われずにロリータ文化に参加することを通じて、女性を性的対象物にする男性中心社会に抵抗している。一方で、美しさ規範（Wolf 1991）の強制力のもとで、K は年齢的限界と、継続的なロリータ文化への参加に対する躊躇をも感じている。また、K は、ロリータママと自ら名乗り、妻・母の役割規範を相対化しているが、一般的に女性に割り当てられるその種の役割規範自体が消えることはなく、それは K の夫によって担われている。ここでは、社会的世界の中心的な担い手と他者の活動を下支える役回りという構図（江原 2021）が男女逆転という形で再生産されている。

5.2　女性性の規範と少女性の関係性

本項では、前項での整理を踏まえ、K の生活史における女性性の規範と少女性の関係性について考察する。

まず、先行研究では、ロリータ文化の少女性と妻・母の役割期待は二項対立として捉えられていた（冨田 2017；徐・穆 2021）。一方、本稿でみてきたように、ロリータ文化の少女性を追求している K は、妻・母の役割を完全に拒否するのではなく、ロリータママとして妻・母の役割と折り合いをつけていた。K は少女性を通じて、妻・母の役割に抵抗し「産後うつ」から「回復」したが、インフルエンサーとして成功したことを通じてロリータママとしてのライフスタイルの正当化に成功した。しかし、K の夫が家事と育児の役割を担っていることから、従来の妻・母の役割を規定する分業構造の影響力は残っていた。

また、先行研究では、ロリータ文化の少女性は、性的対象化を拒否すると論じられていた（吉原 2014；有田 2013）。一方 K は、ロリータ文化の少女性を女性を性的対象物とする男性中心社会から切り離し、主体性として読み替えようとしつつも、美しさ規範（Wolf 1991）に影響され続けてもいた。K がロリータ文化に見出した主体的に生きる可能性は、はじめから若さと美しさと結びついていた。また、大人ロリータとして生きる中、K は年齢的限界を感じていた。K に年齢的限界を感じさせた美しさ規範は、女性が美や若さといった「性的魅力」を持つべきであるという男性中心社会のステレオタイプ（谷本 2018）と強く結びついている。

以上の考察から、K の経験では、ロリータ文化の少女性は先行研究で述べられているように、第二波フェミニズムが中心的に批判した妻・母の役割と女性の性的対象化を相対化しながらも、それらと完全に対立するものではなく、妻・母の役割と折り合いをつけたり、美しさ規範に影響されたりしているものと捉えることができる。主体性の感覚の追求として意味づけられた少女性は妻・母の役割と性的対象化から自らを隔離する成長拒否の願望（松浦 2007）ではなく、むしろ年齢と立場に囚われず、主体的に生活する志向性（田中編 2021）に一致している。

一方、先述したように近年では「新しい女性性」の規範（Budgeon 2011=2020）が登場し、若さと美しさの追求は、男性のまなざしによって外的に要求されるのではなく、女性の積極性と主体性を追求する新たな経路となっている（Gill 2007）。中国においても、消費文化を通じて若さと美しさを追求することは女性の主体性やエンパワーメントと絡み合っている（艾・龐 2015）。K がロリータ文化を消費し、少女性の記号で自らの身体を加工することを内的若さ、すなわち主体性の感覚の追求として再解釈していることは、若さと美しさを通じて主体性を追求する「新しい女性性」の規範に従うものとして捉えることができる。一方、「新しい女性性」の規範のもとで、主体的な女性という輝かしいイメージは、ジェンダー秩序の非対称性を隠蔽して維持・再生産することにつながっているとも指摘されている（菊地 2019）。K が感じている年齢的限界とロリータ文化への継続的な参加に関する躊躇、および夫が家事を担うという形でジェンダーによる分業構造が維持されていることに対する後ろめたさは、「新しい女性性」の規範の危険性を象徴的に示している。

以上の分析を踏まえれば、K の事例においては、ロリータ文化の少女性と男性中心社会における女性性の規範との関係は二項対立（吉原 2014；冨田 2017）では説明できない。そのような二項対立の論理を乗り越えるにあたり、Butler による「エイジェンシー（Agency）」の概念を

参照したい（Butler 1997=2004）。Butler は「従属／抵抗」という単純な図式を批判し、人は構造に規定されながら、構造に影響を与えていく「エイジェンシー」として生きると論じている。丸山は Butler を踏まえ、女性を「完全な能動性でもない、完全な受動性でもない」主体とみなし、ジェンダー構造への抵抗に注目すると同時に、構造に抵抗するのか否かを悩み、逡巡する側面、構造と折り合いをつける側面などに注目する必要もあると指摘している（丸山 2021）。

K の少女性の追求は、女性性の規範に対する抵抗やためらいをともなうものであり、規範との折り合いをつけるという対処を導くものであった。それは構造に抵抗しながら、構造に規定されるプロセスにほかならない。K はロリータ文化との出会いをきっかけに、妻・母の重荷を相対化し、「産後うつ」から「回復」した。また、妻・母の役割と折り合いをつけながら、ロリータママという主体的な妻・母像を提示した。他方、家族に尽くす妻・母の役割が男女逆転の形で再生産されていることに K 自身も気づいており、葛藤を抱えている。そして、K はロリータ文化の少女性を主体性と意味づけているが、それはまた若さと美しさを自己愛的、主体的に追求する「新しい女性性」の規範に一致しているものである。ただし、若さと美しさの再発見が主体的な生き方を追求するためのきっかけになったことや、K が年齢的限界を感じたことの背後には、若さと美しさで女性の価値を定める男性中心社会の影響力の強さが窺える。

6. おわりに

本稿では、大人ロリータ K の生活史に着目し、K が自身をとりまく女性性の規範をどのように受け止めて、それとの関連のなかで、少女性をいかに意味づけてその追求を実践してきたのかを示してきた。分析の結果、K はロリータ文化の少女性を通じて主体性を追求しながら、妻・母の役割と美しさ規範を完全に拒否するのではなく、それに対して折り合いをつけて生きていることがわかった。同時に、主体性を志向するロリータ文化の少女性は、「新しい女性性」の規範と重なり合い、ジェンダー秩序の非対称性の隠蔽につながる危険性を帯びたものでもあった。近年、日本でも大人ロリータが顕在化しつつある。本稿が着目した中国のロリータママとは異なり、日本の大人ロリータは、年を重ねても家庭に入ることを拒否し、少女性を追求し続けるという文脈で捉えられている（冨田 2017）。日本の大人ロリータをとりまく女性性の規範と彼女たちが求めている少女性の意味もまた、重要な探求課題である。本稿の知見は、日本の大人ロリータの文化実践を考察するための参照軸として用いることができるであろうが、日中の大人ロリータの詳細な比較は、今後の課題としたい。

本稿で取り扱ったのは単一の事例である。しかし、K の経験、すなわち「産後うつ」の「発症」、子どもへの献身という妻・母の役割規範による抑圧、加齢にともなう不安等は、多くの女性が日常生活の中で経験した、あるいは経験することである。したがって、K の事例から、ロリータ文化の少女性と、妻・母の役割規範や美しさ規範との関係性を明らかにすることの意義は大きい。インフルエンサーとして活躍している K は、成功者という意味では確かに少数派であるが、大人ロリータとして影響力を持っている K は、まさに主体性と積極性をもっとも成功裏に提示している存在として多くの女性に憧れられている。それゆえ、主体的な生を追求する姿勢を要請する「新しい女性性」の規範を考察するための手がかりとしては、最良の事例であったと言えるだろう。本稿で得られた知見は、より豊富なデータによる検証が必要であるが、

それは今後の課題である。

注

1. 2015 年にロリータ文化専門誌『GIRLISM 少女主義』が創刊された。経済新聞『第一財経』の記事「穿洛麗塔装的人，背後有一個怎様的世界」によると、同年前後に、ロリータブランドは急増した（https://mp.weixin.qq.com/s/UBdQRjQyxefBoGHKLOQEiQ，2023 年 11 月 7 日取得）。コンサルティング会社、Mob 研究院は 2021 年、ロリータ文化を若い女性の消費と趣味の傾向性を代表するものの一つと位置づけている（http://www.mob.com/mobdata/report/127，2023 年 11 月 13 日取得）。2023 年現在、上海では「ロリータ文化の街」が出現している。

2. Weibo（中国の SNS）では数十万人規模のフォロワー数を持っているロリータママがいる。例えば、インフルエンサー「糕糕」は Weibo で 41.8 万人のフォロワー数を持っている（https://weibo.com/caaake，2023 年 8 月 23 日取得）。また、中国では有名なロリータブランドである「仲夏物語」、「古典玩偶」などが親子ペアルックのロリータ服を発表している。

3. 修士論文執筆のための調査である。馮可欣，2023，「ロリータを着て『少女』になる――少女期の追体験と女性性の回復の交差点にある中国のロリータファッション文化――」京都大学教育学研究科 2022 年度修士論文（未公刊）。

4. 10 月の追加調査は、本稿の第一稿に対する査読者のコメントを受けて、行なった。

5. インタビューにより、医師によるうつ病の診断は受けていないことを確認済みである。

6. 記述の部分における「」内の内容はインタビューからの引用である。以下同様。

7. ホットママをヒロインとするドラマ作品の中で、もっとも注目され、画期的な存在とみなされているのは『辣媽正伝（HOT MOM）』（2013）である。配信開始から 7 日間の視聴人数は 2 億人を上回る（https://m.163.com/ent/article/99PA8VDG00031GVS.html，2023 年 8 月 23 日取得）。

参考文献

有田亘，2013，「『視線革命』としてのロリータ・ファッションへむけて」『国際研究論叢：大阪国際大学紀要』vol.26:1-20.

江原由美子，2021，『ジェンダー秩序［新装版］』勁草書房.

菊地夏野，2019，『日本のポストフェミニズム――「女子力」とネオリベラリズム』大月書店.

北村文，2017，「ジェンダーをする――逸れる，盛る，かき乱すファッション」藤田結子・成実弘至・辻泉編『ファッションで社会学する』有斐閣，111-130.

丸山里美，2021，『女性ホームレスとして生きる――貧困と排除の社会学』世界思想社.

松浦桃，2007，『セカイと私とロリータファッション』青弓社.

西村則昭，2004，「『ゴシック』な世界観と『乙女』のアイデンティティ――あるストリート・ファッションをめぐる魂の現象学の試み」『仁愛大学研究紀要』vol.3:23-37.

高橋幸，2020，『フェミニズムはもういらない、と彼女たちは言うけれど――ポストフェミニズムと「女らしさ」のゆくえ』晃洋書房.

田中東子編，2021，『ガールズ・メディア・スタディーズ』北樹出版.

谷本奈穂，2017，「外見と自分らしさ――何のため/誰のために外見を整えるのか」藤田結子・

成実弘至・辻泉編『ファッションで社会学する』有斐閣，92-110.
————，2018，『美容整形というコミュニケーション——社会規範と自己満足を超えて』花伝社.
冨田あゆみ，2017，「『大人』になった『ロリータ』」『女子学研究』vol.7:13-18.
八幡茉莉子・渡辺明日香，2013，「ロリータ・ファッションのルーツ——1980 年代以降のストリートファッションに着目して」『共立女子短期大学生活科学科紀要』vol.56:11-31.
吉原ゆりか，2014，「ロリータ・ファッションはグローカルでフェミである」白百合女子大学言語・文学研究センター編『文学のグローカル研究』弘学社，79-100.
Budgeon, S., 2011, “The Contradictions of Successful Femininity: Third-Wave Feminism, Postfeminism and ‘New’ Feminism,” R. Gill and C. Scharff eds., *New Femininities: Postfeminism, Neoliberalism, and Subjectivity*, London: Palgrave Macmillan, 279-292.（=2020，芦部美和子訳，「成功した女性性の矛盾——第三波フェミニズム、ポストフェミニズム、そしてさまざまな『新しい』女性性」『現代思想』vol.48-4:169-183.）
Butler, J., 1997, *Excitable Speech: A Politics of the Performative*, New York and London: Routledge.（=2004，竹村和子訳，『触発する言葉——言語・権力・行為体』岩波書店.）
Connell, W., 1987, *Gender and Power: Social, the Person and Sexual Politics*, Bristol: Policy Press.（=1993，森重雄・菊地栄治・加藤隆雄・越智康詞訳，『ジェンダーと権力——セクシュアリティの政治学』三交社.）
Cornell, D., 1995, *The Imaginary Domain: Abortion, Pornography & Sexual Harassment*, New York and London: Routledge.
Gill, R., 2007, “Postfeminist media culture: Elements of a sensibility,” *European Journal of Cultural Studies*, vol.10-2:147-166.
Jeffreys, S., 2015, *Beauty and Misogyny: Harmful Cultural Practices in the West*, Second edition, New York: Routledge.（=2022，GC ジャパン翻訳グループ訳，『美とミソジニー——美容行為の政治学』慶応義塾大学出版会.）
McRobbie, A., [1991] 2000, *Feminism and Young Culture*, 2nd ed., New York: Palgrave.
Wolf, N., 1991, *The Beauty Myth*, New York: John Brockman Associates, Inc.
艾玉波・龐雅莉，2015，「女性主義視角下的中国女性消費文化研究」『社会科学家』vol.213:154-160.
曹亜峰，2019，「困惑的鏡像重構：電視劇中都市女性形象解析」『当代電視』vol.8:54-56.
黄薫，2012，「媒介使用角度下的“洛麗塔”亜文化群体身分認同建構研究」上海外国語大学 2012 年度修士論文.
徐亜萍・穆白玥，2021，「Lo 娘的“三次元”文化空間——女性主義後亜文化視角下的穿着経験」『国際新聞界』vol.10:50-68.
趙陽，2019，「洛麗塔文化：新媒体語境下的“服装詩学”」『新媒体研究』vol.23:84-98.

（教育文化学コース　博士後期課程 1 回生）
（受稿 2023 年 8 月 31 日、改稿 2024 年 1 月 5 日、受理 2024 年 1 月 11 日）

「大人ロリータ」から見る女性性と少女性の関係性

－中国のロリータファッション文化参入者の生活史をもとに－

馮　可欣

本稿の目的は、ロリータファッション文化に参加する成人女性が提示している少女性と女性性との関係性を明らかにすることである。これまでの研究は、ロリータ文化の少女性について、女性を性的対象とすることと妻・母の役割規範への抵抗として捉え、両者を二項対立と位置づけてきた。それに対して本稿は、「大人ロリータ」の浮上を踏まえて、中国においてインフルエンサーをしている「ロリータママ」への生活史インタビュー調査を通じて、先行研究とは異なる知見を得た。すなわち、ロリータ文化の少女性は、女性性の規範を相対化しつつも、それを徹底するものとはなっていないこと、またそれは、若さと美しさを通じた主体性の追求（「新しい女性性」）の規範に従うものであることが明らかとなった。

Relation Between Femininity and Girlishness: The Life Story of “Adult Lolita”

FENG Kexin

The objective of this research is to examine the relation between femininity and girlishness exhibited by adult women engaging in the Lolita Fashion Culture. Studies of Lolita Fashion Culture posit that the pursuit of girlishness can be understood as a form of resistance against the dominant heterosexual power structure that tends to objectify women sexually and prescribe rigid roles of wifehood and motherhood. This resistance is characterized by a deliberate detachment from the pressures associated with traditional femininity. In contrast, this paper explores the emergence of “Adult Lolita” through life history interviews with a notable social media influencer known as the “Lolita Mother” in China. The findings diverge from previous research, revealing that the Adult Lolita pursuit of girlishness effectively challenges and redefines traditional notions of femininity linked to the roles of wife and mother. This pursuit aligns with contemporary ideals of “femininity,” embracing consumer culture and promoting women’s autonomous pursuit of youthfulness and physical attractiveness.

キーワード：女性性、少女性、ロリータファッション文化
Keywords: Femininity, Girlishness, Lolita Fashion Culture